

# エートスの観点からみた前半の『プロヴァンシアル』 におけるパスカルの説得のレトリック

望 月 ゆ か

## 序論 パスカルの説得術

「パスカルの全作品のなかで、相手が実際に存在することを前提としない文章は一つもない。…人間と神が、人間と人間が、それぞれ相対して言語活動の中核に常に存在しているのである」とモローシールが指摘しているように<sup>1)</sup>、パスカルは常に他者とのコミュニケーション・対話を実践してきた。相手が神であるとき、その対話は信仰・回心であり、一方、相手が人間であるとき、その対話は説得である。例えば、『パンセ』は無神論者にキリスト教の真理を説得する護教論（のための準備ノート）であり、『プロヴァンシアル』はジャンセニスト擁護とイエズス会攻撃とを目指す世間の人々へ向けられた説得の書である。どちらもパスカル本来の意図としては文学作品として書かれたものではないということは注意しておく必要があるだろう。本稿は、従来宗教思想面からの扱いに偏りがちであった『プロヴァンシアル』をこうした説得の実践の書として読み直そうとする試みであるが、紙数の都合上、分析の対象は『プロヴァンシアル』前半十通の手紙における語り手の性格（エートス）の問題に限定する。

さて、分析を始める前にパスカルの説得観を概観しておく必要があるが、そのために注目すべきは『説得術について』*De l'art de persuader* という小品<sup>2)</sup>である。このなかでパスカルは説得について次のように述べている。

quoi que ce soit qu'on veuille persuader, il faut avoir égard à la personne à qui on en veut, dont il faut connaître l'esprit et le cœur, quels principes il accorde, quelles choses il aime; et ensuite remarquer, dans la chose dont il s'agit, quels rapports elle a avec les principes avoués, ou avec les objets délicieux par les charmes qu'on lui donne<sup>3)</sup>.

説得は、説得しようとするのがらと相手の精神（理性）および心情（意志・快樂）の依拠する原理との関係が確立されてはじめて成立する。説得の出発点は、精神、心情いずれの次元であれ相手の既に認めている原理でしかあり得ない。なぜなら、説得の目的とはペレルマンが述べるように、「前提に対して与えられている同意を結論にも移し及ぼさせること<sup>4)</sup>」だからである。と

ここで、パスカルは説得術を、精神の原理に対応する「説き伏せる術」art de convaincre と心情の原理に対応する「気に入る術」art d'agr eer とに分けている<sup>5)</sup>。前者において、「説き伏せる」は「論証する」d montrer と同義で用いられており<sup>6)</sup>、そのモデルは幾何学的証明である。後者については、原理自体が人間の気まぐれのために一定しないのでその一般的規則を呈示することは不可能である。しかし、個々の場合について「気に入る術」を試みることはもちろん可能である。さらに、この二つの術は共に適応された場合、つまり説得したいことがらが相手の心情の原理(欲望)と精神の原理の両方と緊密な関係をもつ場合、パスカル自身指摘するように、説得はそれ以上ないほどに確かなものとなる<sup>7)</sup>。我々は、例えば『プロヴァンシアル』に二つの術の適応例を見ることができる。

パスカルの説得術は、古代ギリシアに端を発するレトリックの歴史と無縁ではない。そもそも、その歴史の初めにおいて「レトリック」とは、現代のように文彩 figures 中心の修辞学を意味するものではなかった。レトリックの理論体系を論じた古典的書物である。Τ χνη ρητορικ η (『弁論術』)においてアリストテレスは、レトリックを「それぞれの対象に関して可能な説得の手段を観察する能力<sup>8)</sup>」と定義しており、修辞学は、立証、弁論部分の配列、言語表現という弁論術(レトリック)を構成する三つの部分の一つ(言語表現)にすぎなかった<sup>9)</sup>。時代が下がって、フェルチエールの定義からも明らかなように17世紀フランスにおいては、レトリックは既に弁論術と修辞学とに分化していたが<sup>10)</sup>、パスカルの説得術は明らかに弁論術としての古典的意味におけるレトリックの方に属している。

パスカルの説得術は、その大まかな体系の点でもレトリックの伝統にのっとっている。アリストテレスは、説得における(技術的)立証について、1. 弁論自体(ロゴス)によるもの、2. 弁論者の性格(エートス)によるもの、3. 聴き手を一時的にある心の状態におくこと、即ち聴き手の感情(パトス)によるものの三つを挙げている<sup>11)</sup>。最後の二つの倫理的・心的立証はどちらも弁論によって聴き手のある心的状態におくことに関わるが、それが特に弁論者のイメージに由来する場合、それを特にエートスによる立証とする。この分類は大きく論理的要素と倫理的要素とに分けられる点でパスカルの「説き伏せる術」と「気に入る術」と共通している。

ここで一歩進んで「気に入る術」の中にエートスとパトスを探することはできないだろうか。『説得術について』では「気に入る術」についての立ち入った議論はまったくなされていないので、両者についての明白な記述も存在しない。しかしそこでのわずかな記述の中にエートスとパトスの片鱗を見出すことができる。まずエートスについては、先の引用ではそもそも弁論者がクローズアップされている箇所がなかったが、その少し先には次のような記述がある。

Or, de ces deux m thodes, l'une de convaincre, l'autre d'agr eer, je ne donnerai ici que les r gles de la premi re; [...] Ce n'est pas que je ne croie qu'il y ait des r gles aussi s res

pour plaire que pour démontrer, et que qui les saurait parfaitement connaître et pratiquer ne réussit aussi sûrement à se faire aimer des rois et de toutes sortes de personnes, [...] <sup>12)</sup>

アリストテレスの定義によれば<sup>13)</sup>、エートスに頼る説得とは弁論を通じて弁論者が自らを聴き手に対して信頼に値するものであるとのイメージを与える術である。彼は説得に効果的なエートスとして思慮、徳、好意を挙げている<sup>14)</sup>。バルトが述べるように<sup>15)</sup>、弁論者が弁論の間じゅう「私に従いなさい」、「私を尊敬しなさい」、「私を愛しなさい」という共示的メッセージを送ることがエートスによる立証である。さてそこで上に挙げた引用を見てみると「気に入る」agréerが「好まれる」plaire、さらに「愛される」se faire aimerへと意味が少しずつずらされるのと同時に、「気に入る」対象が説得することがから話し手へと移されているが、そこで述べられている、説得の過程で弁論者が愛されるということはまさにエートスに関わる問題である。一方、聴き手のパトスについては、快 agrément を聴き手に与えることが気に入る術の核心であること、また、例えば快を与えてくれるものに対しては愛情を、快を奪うものに対しては怒り、憎しみを抱くというように、快と感情とは密接なつながりがあることを考え合わせると、気に入る術にパトスの影を見ることはあながち見当違いでもあるまい。

以上、我々はパスカルの説得術の中にレトリックの伝統であるロゴスとエートスとパトスを見出すことができた。以下では、エートスの観点から、実際に『プロヴァンシアル』（前半）のレトリックの分析を行う。

## 第一章 『プロヴァンシアル』（前半）の差出人と宛先人における虚構性と現実

### 1 作者と語り手

『プロヴァンシアル』は、カトリック改革時代に恩寵と人間の自由意志との関係、及び道德の問題をめぐる複雑に繰り広げられた論争を背景として、1656年1月から翌1657年3月（「第十八の手紙」の実際の流布時期は5月の初め、また「第十九の手紙」は断片のままに終わった）にかけて一通ずつ官憲の目をかいくぐって出版された匿名の論争書簡である。本稿で取り上げる前半の十通のうち、「第三の手紙」まではソルボンヌでのアルノー譴責をめぐる恩寵に関する話題<sup>1)</sup>、「第四の手紙」以降、直接のターゲットはイエズス会に移り、特に「第五の手紙」から「第十の手紙」まではイエズス会の良心例学者のたるんだ道德の教え<sup>2)</sup>を取り上げており、この十通全てが架空の「田舎の友」Provincialに宛てられている。

さて『プロヴァンシアル』は、パスカル個人の手によるものではなく、ジャンセニスト陣営のアルノー Antoine Arnauld やニコル Pierre Nicole との共同執筆の作品である。パスカルは彼ら

の著作、ならびに彼らとの打ち合わせに基づき手紙を執筆した。しかし、その事実は『プロヴァンシアル』の作者をパスカル個人に帰することの妨げにはならない。なぜなら執筆当時、彼は神学に関してはアルノーやニコルに匹敵する知識をもっており（そのことは、その執筆年代が『プロヴァンシアル』に先立つとされている『恩寵文書』*Écrits sur la grâce* などから明らかである<sup>3)</sup>）、「ポール・ロワヤルの秘書<sup>4)</sup>」であるどころか、一人の神学者として、専門的な原資料を独自の仕方を利用して、またそれをもとにかみくだかれた神学議論を展開しているからである。

ところで先に触れたようにビラの形で現われたときは匿名だった手紙は、1657年、十八通の手紙を合本することになり、*Les Provinciales ou les lettres écrites par Louis de Montalte à un Provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites, sur le sujet de la morale et de la politique de ces Pères* という題が付けられ、この時初めて手紙の作者にルイ・ド・モンタルトという偽名が与えられた<sup>5)</sup>。モンタルトの正体についてはさまざまな憶測が飛び、その様子が「第八の手紙」の冒頭でも語られているが、結局、イエズス会士から作者はパスカルではないかとの推測が現れたのは1659年になってからにすぎない。

『プロヴァンシアル』の作者をパスカル個人に同定したところで、今度は作者パスカルと虚構の語り手モンタルトとの関係について考えよう。結論から言えば、パスカルとモンタルトを同一視することはできない。既に述べた通り、パスカルは「第一の手紙」執筆当時、神学者並みの知識の持ち主であったのに対し、モンタルトは神学について少なくとも最初のうちは全くの素人だからである。それでは、なぜパスカルは匿名・偽名のもとにわざわざ虚構の語り手を登場させたのか。その理由として例えば以下のことが考えられる。第一に、手紙が秘密出版だったために官憲の追求を逃れようとしたこと。第二に、序論で述べたように、「気に入る術」は説得を有効にするために聴き手に愛されることをめざすが、そのことはパスカルが『パンセ』で批判しているオネットムのエゴイズムに通じる。パスカルは、この矛盾した事態を解決するために偽名を使用し、作品に「憎むべき自我」*le moi haïssable*<sup>6)</sup>が現われるのを回避したのではないかということ。第二の回心以後、パスカルの生前に公刊された著作には、全て偽名が用いられている。『プロヴァンシアル』には Louis de Montalte、サイクロイドに関する論文（1658）には Amos Dettonville、そして「護教論」完成の暁には Salomon de Tultie という偽名が付されるはずだったのは『パンセ』L745-B18より確実である。これら三つの偽名はアナグラムとなっており、事態がパスカルの望み通りに運ば、各著作の作者は他の著作のそれとの関連でしか同定できないようになるはずであった。しかし、以上の理由は匿名・偽名については説明してくれるが、なぜモンタルトという神学の素人を虚構の語り手として登場させたのかは説明できない。彼の存在の意義を理解するには、弁論、弁論者のエートス、聴き手のパトスという説得の三要素との関連を考えねばならない。本稿の目的は弁論者のエートスとの関わりにおける虚構の語り手の存在のレトリック上の意義について明らかにすることにある。

## 2 真の説得相手

説得の目的はあくまでも聴き手である。アリストテレスは聞き手を民会議員、裁判官、見物者の三種類に分け、そこからそれぞれ、忠告的弁論、法廷的弁論、演示的弁論の三種を区別した<sup>7)</sup>。『プロヴァンシアル』のような論争書簡は法廷的弁論に属しており、聴き手、即ち読者は裁判官の役割を果たす。多くの論争の場合、真の説得相手は、論敵ではなく第三者たる裁判官あるいは公衆であるとデコットが述べているが<sup>8)</sup>、前半の『プロヴァンシアル』の場合も、架空の「田舎の友」に代表される現実の人々を現実世界の論争の裁判官とみなしている。それでは、「田舎の友」の名のもとにパスカルが意図した読者層とはどのような人々なのだろうか。第一と第二の手紙に対する田舎の友の返信からそれを伺い知ることができる。

Vos deux lettres n'ont pas été pour moi seul. Tout le monde les voit, tout le monde les entend, tout le monde les croit. Elles ne sont pas seulement estimées par les théologiens; elles sont encore agréables aux gens du monde, et intelligibles aux femmes mêmes<sup>9)</sup>.

これは、手紙が「田舎の友」に代表される「皆」*tout le monde*に宛てられた公開書簡であることのマニフェストであり、また、「皆が読み、皆が理解し、皆が信じている」《*Tout le monde les voit, tout le monde les entend, tout le monde les croit.*》という部分は、現代の公告でもお馴染みの先陣効果によるプロパガンダでもある。さて、ここでの「皆」は具体的には、神学者、社交界人士(オネツトム)、及び女性たちを指しているが、力点が置かれているのは、神学には素人の人たちの方ようである。このことは、イエズス会の良心例学の教えを述べている部分(第五から第十の手紙に相当する)の文体についての姪マルグリット・ペリエ Marguerite Périer の証言により確認することができる。彼女によれば、パスカルは、その友人たちに、イエズス会の教えを教条的な文体で書けば、それについての知識を既にもっている専門家にしか読んでもらえない、当時あらゆるところに広まっており、簡単に信じられてしまう会の教えの危険性を女性を含めた社交界の人々に知らせるには、彼らに楽しんで読んでもらえるような「快く、からかい調子の、おもしろい文体」*un style agréable, railleur et divertissant*<sup>10)</sup>で手紙を書く必要があったと語った。ここからパスカルの狙った読者層は女性を含めた社交界の人々であると結論することができる。

ところで、社交界の人々をも読者として想定する神学的書物は、『プロヴァンシアル』が最初ではない。イエズス会とジャンセニストとの論争の歴史において、例えば、アルノーの『頻繁な聖体拝領について』*De la Fréquente Communion* (1643) は、インテリの女性信者を初めとする一

一般人の間でよく読まれた<sup>11)</sup>。『プロヴァンシアル』に特徴的なことは、神学に関心のない一般人をも読者に取り込もうと狙った点である。パスカルは彼らに向けてレトリカルな虚構の形式を用いつつ、現実世界におけるジャンセニストに対する陰謀ないしイエズス会のキリスト教の教えとも社会的モラルとも対立するような道徳の教えの実態を訴え、宗教的関心の有無に関わらず、できるだけ多く的一般世論をジャンセニストの味方に付けることをめざした。

## 第二章 語り手のエートス

### 1 好意

弁論は、たとえ論理においてすぐれていても弁論者の印象が悪ければ、聴き手を説得することはできない。それは法廷的弁論である『プロヴァンシアル』においても同様であって、裁判官である読者の説得のためには語り手のエートスを考慮することがきわめて重要である。では、『プロヴァンシアル』の説得は具体的にどのようなエートスに頼っているのだろうか。序論で引用した『説得術について』の部分は好意のエートスについて述べていると考えることができるので、まず好意のエートスから考察することにしよう。

語り手は一当初は名無しであったこの人物をこれからは便宜上モンタルトと呼ぶことにする—読者に対して少なくとも二つの方法で好意のエートスを誇示していると思われる。第一は、モンタルトと読者を共犯関係におくことによるものである。この関係は、「第一の手紙」の冒頭の「ぼくたちはもの見事にだまされていたんだ」《Nous étions bien abusés<sup>12)</sup>》という言葉で一挙に確立される。この場合の《nous》は、手紙の宛先人である「田舎の友」と、まだだまされていることを知らなかった手紙を書く前のモンタルトを指しているが、また同時に「田舎の友」の背後にいる読者もまたその情報量のわずかさによって《nous》の中に取り込まれる。手紙を書いている時点のモンタルトの方は、いくつかの会見を行った結果次のことを突き止めている。すなわち、アルノーの『第二の手紙』をめぐるソルボンヌでの法問題についての審議は、一般に信じられているような恩寵に関わるものではなく、両義的な「近接能力」pouvoir prochainという言葉を利用したのモリニストと新トマス派との間のアルノーに対する政治的陰謀が裏にあり、アルノーが異端だとすれば、それはその主張によってではなく近接能力という語を使わない限りにおいての名ばかりの異端にすぎない、ということである。そして語り手モンタルトは「第一の手紙」の中で、反アルノー派の神学者たちが素人の無知をいいことに、専門用語を隠れ蓑にしていかに読者をだましていたかを示しつつ、同時に「ぼくもあなたたちと同様にだまされていた素人だ、ぼくは皆さんの仲間だ」という共示的メッセージをとばす。それによって彼はいわば共犯関係にある読者に対して好意をもつ人物であることを誇示し、読者の好印象を獲得しようとしている。

好意のエートスを与える第二の要素は、モンタルトの語りぶりである。「田舎の友からの返信」には本物の手紙と思われる手紙が二通抜粋されているが、その内の一通で女性からの手紙<sup>2)</sup>は「第一の手紙」の書きぶりが当時の社交界の人々を魅惑したことの一つの証拠である。そこには次のような感嘆の言葉が連ねられている。

elle [=la Première Lettre] est tout à fait bien écrite. Elle narre sans narrer; elle éclaircit les affaires du monde les plus embrouillées; elle raille finement; elle instruit même ceux qui ne savent pas bien les choses, elle redouble le plaisir de ceux qui les entendent<sup>3)</sup>.

神学の素人ならではのわかりやすさ、巧みな揶揄などが魅力ある書きぶりとして挙げられているが、これらはいずれもモンタルトの読者に対する好意を示すものである。なぜなら、わかりやすさは「近接能力」という専門用語で一般人の目から問題の核心を隠そうとする神学者の悪意とは逆の、同じ素人としての好意のあらわれであり、一方、神学者たちへの揶揄は読者とモンタルトとの間の共犯関係を強調し、その前提であるモンタルトの読者への好意を感じさせることになるからである。モンタルトはこのような書きぶり、文体によっても読者の気に入るのだが、しかし、実際の文体上の分析は、エートスの属する発想 *inventio* の領域ではなく言語表現 *elocutio* の領域に属する問題であるので本稿では扱わない。

好意のエートスを与える第二の要素であるモンタルトの語りぶりは、結局第一の要素である共犯関係に収斂している。そして好意のエートスの大本であるこの共犯関係を保証しているのが、書簡形式である。例えば《Première Lettre écrite à un Provincial par un de ses amis, sur le sujet des disputes présentes de la Sorbonne》という題が示す通り、これはモンタルトが友人としてしたためた手紙であり、モンタルトと読者との間の共犯関係が成立し得るのも、もともとモンタルトと、現実の読者を象徴する田舎の友の間の友人関係が書簡形式によって前提されているからである。

## 2 思慮

さて、前節では『説得術について』の記述を出発点に、モンタルトの好意のエートスについて考察してきた。しかし『プロヴァンシアル』では好意と同時にアリストテレスが挙げている思慮もまたエートスとして機能している。好意のエートスが神学に素人の語り手の存在と密接に関わっていたように、思慮のエートスも作者パスカルとは別人の語り手の存在があって初めて得られるものである。なぜなら、ここでの思慮のエートスはモンタルトの中立的立場から生まれているからである。

「第一の手紙」の目的はソルボンヌで詮議を受けているアルノーの弁護であるから、単なる匿名、偽名で語った場合はその内容がジャンセニスト寄りの偏見を含んだものと受けとられる恐れがある。そこでポール・ロワヤルとは無関係という設定の架空のモンタルトを登場させ、党派的私情を一切含まず、正しい判断を下すことのできる思慮のエートスの持ち主であることを誇示する必要がでてくる。例えば次の箇所は彼の中立性、つまり思慮のエートスを示している。

car, que M.Arnauld soit téméraire ou non, ma conscience n'y est pas intéressée<sup>4)</sup>.

前教皇インノケンティウス十世が大勅書『クム・オカージオーネ』で断罪した五命題がジャンセニウスの『アウグスティヌス』には見当たらない、とアルノーが『第二の手紙』で述べたことは、教皇並びに大勅書を受け五命題がジャンセニウスの教義から引き出されたと断定した1653年3月の高位聖職者会議に対する不遜である、という事実問題について、パスカルはモンタルトにそっけない態度を取らせ、彼があくまでもアルノー陣営からは距離を置いた第三者であることを読者に印象づけ、同時に「第一の手紙」全体における彼の判断は思慮の伴ったものであるから彼に同調せよと暗に促している。

さて、中立的立場によって誇示される思慮のエートスは、前節で考察した好意のエートスによって補完される必要がある。なぜなら、『パンセ』の一断章は次のような警告をしているからである。

Quoique les personnes n'aient point d'intérêt à ce qu'elles disent il ne faut pas conclure de là absolument qu'ils ne mentent point car il y a des gens qui mentent simplement pour mentir<sup>5)</sup>.

従って、モンタルトを利害関係のない立場に置き公正な判断をさせるとともに、その判断を率直に嘘を交えずに読者に伝えていることを保証する好意のエートス（なぜなら好意と嘘とは、嘘をついたほうが相手のためでないかぎり両立しないので）を添えることが、彼が読者に対し信頼に値することを示すのに不可欠なのである。このことは言い換えれば、書簡形式は好意のエートスを保証するだけでなく間接的に思慮のエートスを補強しているということである。前半の「プロヴァンシアル」には全体を通して、三つの語りの形式—書簡形式、対話形式、引用形式—が登場し、「第三の手紙」までは書簡形式の中に残りの二つの形式が組み込まれる形をとっており、「第四の手紙」からは、書簡形式の中に対話形式、対話形式の中に引用形式が組み込まれる入れ子構造をとっているが、実は、こうした語りの絡み合い全体がモンタルトのエートスを強化もしくは保証するレトリック上の戦略となっている。書簡形式とエートスの関係は既にみたので次章では

残りの二つの形式とエートスとの関係を考察する。

### 第三章 証人・証拠の提出における語りの形式と思慮のエートス

#### 1 対話形式の場合

法廷的弁論では証人・証拠の扱いが重要であるが、それは『プロヴァンシアル』においても同様である。特にこの作品では読者に明かされる事実がかなりショッキングで信じがたい内容の場合も少なくないので、既に示されているモンタルトの中立的立場が疑われ、説得効果に破綻を来す恐れもある。従ってモンタルトがその判断の根拠として証人・証拠を提示する場合に、彼が依然として偏見の解釈や証拠の捏造を退ける中立的態度で臨んでいることを示し、公正な判断を可能にする思慮のエートスをモンタルトのうちに確保しておかねばならない。書簡形式の中に入れ子構造になった対話形式と引用形式は、証人・証拠の提示の際の手紙の書き手モンタルトの思慮のエートスを補強するためのレトリック的装置である。まずは、モンタルトが行った会見の報告である対話形式に目を向けてみよう。

最初の対話形式が登場するのは「第一の手紙」の後半であるが、ここでの対話形式とエートスとの関わり合いはきわめて顕著である。

この手紙で読者に報告される会見は、第二章で触れたように、恩寵の問題をめぐる行われているものと一般には信じられているソルボンヌでのアルノー審議の裏に、両義的な「近接能力」という言葉を利用してのモリニストと新トマス派の政治的陰謀あり、という真相にモンタルトが達するまでの過程である。そこに至るまでにモンタルトは順に、ナヴァール学寮の博士の某氏、もう一人の某氏から紹介された彼の義兄弟のジャンセニスト、再び某博士、再びジャンセニスト、ル・モワヌ氏（モリニスト<sup>1)</sup>）の弟子、ニコライ神父と同様の説を奉じる新トマス派の神父（ドミニコ会士、複数<sup>2)</sup>）、そして最後に新トマス派の神父とル・モワヌ氏の弟子両者と会見する。彼らはいずれも架空の人物ではあるが、現実のソルボンヌ審議に関わる人物の象徴、もしくは彼らの戯画となっている。某博士がジャンセニウスの『アウグスティヌス』から五命題を引き出して譴責を要求したニコラ・コルネを暗に指していることは当時の読者には明白であり、また、ル・モワヌとニコライ神父は実際にソルボンヌの審議に加わっており、モンタルトが会見するところの前者の弟子や新トマス派の神父たちは現実の二人を代表する存在となっている。従って、外見上は虚構の人物である彼らの言葉は、読者の頭の中で容易に現実世界の三人の主張に転化するのである。

さて、パスカルは彼らを証人としてモンタルトとの会見に登場させ、その言葉を対話形式で、即ち直接話法を用いて報告させることにより、モンタルトが現実をそのまま読者に報告している

という外観を与えしめる。なぜなら、直接話法によって登場人物の言葉は、たとえどんなに信じがたい内容であっても「実際に」彼が語ったそのままの言葉であり、書き手の操作は加わっていない、という印象を読者に植え付けることができるからである。パスカル自身が第四の会見のなかでジャンセニストに語らせている言葉は、まさにこの点に関わるものである。

Je vous en éclaircirais de bon cœur; mais vous y verriez une répugnance et une contradiction si grossière, que vous auriez peine à me croire. Je vous serais suspect. Vous en serez plus sûr en l'apprenant d'eux-mêmes, et je vous en donnerai les adresses<sup>3)</sup>.

法問題の核心を知ろうとさんざん苦勞した末に某博士から、全ての義人が常に持つところの律法を遂行する能力をジャンセニストが「近接」能力と呼ばないところに問題があるということを知り出したモンタルトは早速ジャンセニストを再訪するが、そこで彼から「近接」という言葉は反アルノー陣営が彼を陥れるために、意味の上ではそれぞれ別様に解釈しつつも名辞の上だけで一致しているのだと聞かされる。ではそれぞれの解釈を聞かせてほしいというモンタルトに対してジャンセニストが語った言葉が上記の引用である。最終的にモンタルトが確かめた真相は、モリニストは近接能力に関して効果的恩寵の必要性を認めていないのに対し、新トマス派はこれを認めており、この点で後者の解釈はジャンセニストの解釈、即ちソルボンヌで問題になっているアルノーの『第二の手紙』の中の主張と一致している、ということである。しかし、それをジャンセニスト自身がモンタルトに語っても、彼には、そしてまた読者にも、虚偽の自己正当化と受け取られてしまう恐れがある。当時者である彼自身が語って「疑わしい suspect」印象を与えないために、ジャンセニストは第三者の直接の言葉によって確かめてくるようにモンタルトに勧めるのである。第三者の直接の言葉を証拠として提出することは説得上きわめて有効であり、それを書かれたテキストにおいて提出できるのが直接話法を用いた対話形式である。その意味で、ジャンセニストの上記の言葉は『プロヴァンシアル』における対話形式の説得効果を考察する上できわめて大きな意義をもっていると言えよう。

さて、「第一の手紙」でこの形式が最も有効に利用されているのは最後の会見の場である。モンタルトが新トマス派の神父に対し、彼らの「近接能力」の解釈に従えば、モリニストが異端、ジャンセニストが正統となると追い詰めたところでタイミングよくル・モワーヌ氏の弟子がやって来る。そして、モンタルトの誘導尋問につられて一人の神父が近接能力の解釈を述べようとする時、ル・モワーヌ氏の弟子が彼をさえぎってこう言う。

Voulez-vous donc recommencer nos brouilleries? ne sommes-nous pas demeurés d'accord de ne point expliquer ce mot de *prochain*, et de le dire de part et d'autre sans

dire ce qu'il signifie<sup>4)</sup>?

手紙の書き手モンタルトが自身の会見で得た情報として、以上の言葉を要約、もしくは彼なりの言葉で報告したら、その余りに信じがたい言葉に、ちょうどモンタルトが近接能力の各派の相反する解釈をジャンセニストから聞かされた場合に抱いたであろうのと同じ「疑わしい」印象を読者はモンタルトに対して抱いてしまったであろう。反アルノー陣営の純粋な政治的陰謀、これこそがパスカルが「第一の手紙」で読者に説得したかったことであり、モンタルトの全会見もこのラストシーンに向って収斂している。モンタルトが会見で得た情報をもとに下したこの判断を読者が信じるか否か、それはモンタルトの語り手としての思慮のエートスにかかっている。そして、説得上きわめて重大なそのエートスを強化するものこそが対話形式なのである。

## 2 引用形式の場合

『プロヴァンシアル』の語りの三つの主要な形式の最後のものである引用形式に関するエートスの考察に移るが、その対象としては読者に圧倒的な読む楽しみを与えている「第五の手紙」から「第十の手紙」のイエズス会のたるんだ道徳の教えを扱った部分を扱う。

さて、対話形式が証人の提示に信憑性を与えていたのに対し、引用形式はこれから見ていくように証拠の提示に信憑性を与えている。法廷的弁論における証言となる以上、引用はあくまでも正確に行われなければならない。『プロヴァンシアル』論争の発端がそもそも、異端とされた五命題がジャンセニウスの著書に実際に存在するかどうかという事実問題、つまりその該当箇所を引用できるか否かという点についてのジャンセニストの反論であったという事実を考えると、引用の正確さにパスカルが神経を使ったことは間違いない。「第十一の手紙」は、前半の手紙で展開した作者自身の書きぶりを弁護する内容だが、彼は正確さということについて次のように力強く主張している。

Aussi, mes Pères, je puis dire devant Dieu qu'il n'y a rien que je déteste davantage que de blesser tant soit peu la vérité; et que j'ai toujours pris un soin très particulier non seulement de ne pas falsifier, ce qui serait horrible, mais de ne pas altérer ou détourner le moins du monde le sens d'un passage<sup>5)</sup>.

パスカルは引用をイタリックで示したが、その部分は厳密な意味での引用であることは非常に少なく、ほとんどが原文を省略、要約、あるいは切り貼りしたものである。これは読者の質を念頭に置いてのことであり、ニコルが神学者用にラテン語に訳したときには引用は原文に忠実な形で長々と再録された。しかし、パスカルが証拠となるべき引用の内容的正確さに特別気を使って

いたことは確かな事実である。

「第五の手紙」以降、パスカルはイエズス会の良心例学の教えがキリスト教的モラルに反するばかりか社会的常識的モラルにも反するものであることを攻撃していくが、その非難に根拠を与えるためには、後半の『プロヴァンシアル』でパスカルが述べているように確固とした証拠の提示が必要である<sup>6)</sup>。ここで問題にしている引用については、その出典を明示することで内容に確固たる信憑性が加わる。実際に前半の六通の手紙を眺めてみても、良心例学者の著書の参照箇所の項目やページの数字があふれる様子はまるでラブレの作品を読んでいるかのような錯覚を抱くほどであり、中には版まで示しているものもある<sup>7)</sup>。

さて、出典を明示され、イタリックで印刷されている引用は、その内容がどんなに信じがたいものであっても、読者に対していわば暴力的に自らの真実らしさを誇示してくる。モンタルトが「田舎の友」に宛てて途方もないイエズス会の自画自賛の言葉を引用しながら皮肉っぽく書いたように。

Vous pensez peut-être que je raille : je le dis sérieusement, ou plutôt ce sont eux-mêmes qui le disent dans leur livre intitulé : *Imago primi sæculi*. Je ne fais que copier leurs paroles,[...] Il le faut croire puisqu'ils le disent<sup>8)</sup>.

内容に賛同するしないは別として、引用の形式を踏みさえすれば、引用された言葉が本当に著者によって言われたということが自動的に前提されてしまうのである。これは対話形式による報告と同じであるが、引用の方は話し言葉ではなく印刷された文字による証言という点で、より客観性を帯びていると言えるかもしれない。

出典を添えた引用形式を用いることによって、語り手モンタルトの中立性、従って思慮のエートスは強化されるはずである。が、その引用のあまりにもショッキングな内容に、仮にモンタルトが直接会の著作から引用してきた場合、引用形式によって中立性が強化されるどころか、逆に「第一の手紙」でアピールされた中立性を打ち崩し、引用者モンタルトが形式的に得られる信憑性を悪用しているのではないかという疑いを読者に生じせしめる恐れがある。そこでパスカルは、イエズス会の道徳の奇怪な教えを友人のジャンセニストから聞かされたモンタルトが彼の話信じかね、会の神父に直接教えを請いに行き、友人の話が本当であったことを確認するという設定にし、引用が神父自身の口からなされ、モンタルトはそれを忠実に報告する<sup>9)</sup>という形を選んだ。

しかし、この設定だけではまだ十分ではない。なぜなら、衆目にさらされれば自派の立場を危うくすることになる教えを神父が部外者であるモンタルトに教えるものだろうか、という疑念が読者に生ずる可能性があるからである。そうなれば対話の真実らしさ、ひいてはそこで語られる内容の信憑性及びモンタルトの中立性が疑われることになる。そうした事態を避けるためにパス

カルは神父の人物設定に工夫を凝らした。その設定によれば、神父は、会の神父たちに非常な尊敬を抱いているが故に、彼らの本質であるところの「人間臭い政略的な抜け目なさ」leur prudence humaine et politique<sup>10)</sup>には気付かず、その隠れ蓑にすぎない「神聖なキリスト教的賢明」une prudence divine et chrétienne<sup>11)</sup>しか目に入らない単純で根はいい性格の人物である。会へのその度外れの心服ぶり故に、神父は彼自ら強調するように<sup>12)</sup>、自分の個人的意見や解釈を述べることは決してなく、良心例学の教えの紹介の際は常に会の著作を「権威」として引用する。こうした神父の存在が、イエズス会のたるんだ道徳の教えを証拠として提示する際に、その正確性・信憑性を保証する上で実に大きな働きをしているのである。特に、紹介される教えの内容がショッキングになればなるほど、いわば引用熱にとらわれている彼の存在は説得効果の上で重みを増してくる。例えば、平手打ちを受けた場合、憎しみや復讐心に駆られてではなく、名誉を守るためならば「意思を導く diriger l'intention<sup>13)</sup>」ことによって相手を殺してもよいという教えを語ってから、神父はさらに、平手打ちを受けそうになった場合、その前に相手を殺してもよいと述べるが、その証拠として彼は十人もの著者を引き合いに出してくる<sup>14)</sup>。さらにその後で嬉々として、「もっといろいろ挙げましょうか」En voulez-vous davantage?<sup>15)</sup>と付け足す。あるいは、修道士が僧服を脱げば色町へ行ってもよいという件<sup>16)</sup>では、仏訳に原文のラテン語を部分的に添えて引用の正確さを強調する。これらに加えて、神父は教えに関して何も隠し立てしていないと声明する<sup>17)</sup>。それに彼は、巧妙な会の教えを語ることが自慢でたまらない。一通りある主題についてモンタルトに教授してから、生徒モンタルトの進歩を試すために彼はわざとイエズス会士はジャンセニストを殺してもよいかといったようなひっかけ問題を提出したりする<sup>18)</sup>。

イエズス会の良心例学の教えは、正確な引用に裏付けられたこと以外何も語らず、かつ全てを語ってくれる神父によって引用される、つまりモンタルトに向って読み上げられる。そして、その教えは会見相手の言葉をそのまま収録する対話形式の中に、引用の形式を保ったまま組み込まれる。その結果、情報は信憑性を持ち、また、モンタルトが引用を正確に読者に報告する中立的立場にあること、従ってその判断も信頼のおけるであろうこと、つまりモンタルトの思慮のエートスが誇示されることとなる。

前章と本章の考察から、書簡、対話、引用という三つの語りの形式が、入れ子構造の中で絡み合いながら、最終的には語り手モンタルトの好意ないし思慮のエートスを保証または強化し、読者がモンタルトに良い印象を抱くよう促すレトリック的装置であることが明らかになった。

## 結論 モンタルトの「書きぶり」

我々はこれまでにモンタルトという神学に素人の虚構の語り手の存在が説得に果たす役割をエ

エートスの観点から分析してきた。そこで確認されたのは、神学面の知識の少なさによって結ばれる読者との共犯関係、党派的利害から離れた中立的立場によってモンタルトが「私を愛してください」、「私の判断に従ってください」という好意と思慮のエートスをアピールしているということであった。また、それらのエートスが、書簡、対話、引用という重層的な語りの構造によって保証、強化されていることも合わせて示した。『プロヴァンシアル』は、語り手の印象を読者の気に入るように運び、かつわかりやすい論理で説き伏せ、最終的に読者の感情をモンタルトの側に有利に、また論敵の側に不利に導くことによってアルノー弁護の気運とイエズス会に対する反感を一般世論の中に盛り上げようとした。本稿ではそのうちのエートスに関わる部分しか扱えなかったが、ここで述べた読者との共犯関係、揶揄は読者のパトスに、またわかりやすい語りぶりは論理及びパトスに関わっており、その意味でモンタルトという架空の人物を登場させたことは、『プロヴァンシアル』全体の説得のレトリックにおいて実に効果的な戦略であったといえるだろう。

ここで今までにも論及してきた『パンセ』の断章を引用しよう。

La manière d'écrire d'Epictète, de Montaigne et de Salomon de Tultie est la plus d'usage, qui s'insinue le mieux, qui demeure plus dans la mémoire et qui se fait le plus citer, [...] <sup>1)</sup>.

「彼が言いたかったことしか我々にはわからない」と『プロヴァンシアル』の語り手についてニコルが言っているように<sup>2)</sup>、モンタルトの姿、すなわちエートスは彼の「書きぶり」manière d'écrire からしか明らかにされない。そして、彼のエートスが『プロヴァンシアル』の説得上きわめて大きな役割を終始担っていることを考えるならば、モンタルトの「書きぶり」そのものが『プロヴァンシアル』の説得のレトリックであると言えるのではないだろうか。

## 註

\* 本稿は1988年度東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門過程の修士論文として提出した「パスカルの書きぶり—『プロヴァンシアル』における説得のレトリック—」の一部を1989年2月のパスカル研究会発表後加筆訂正したものである。

\* 『プロヴァンシアル』の版は、1657年の最初の合本時の初版に依拠する《フランス大作家叢書》版とパスカルの生前中の最も新しい版である1659年版に依拠するコニエ版とがあるが、我々は後者によって引用した。Les Provinciales, publiées par L.Cognet, Garnier, 1965.

\* 引用部分の訳については、パスカルの著書は拙訳、その他の著書は翻訳のあるものについてはその訳

を参考にした。

## 序論

- 1) Édouard Morot-Sir, *La métaphysique de Pascal*, P.U.F., 1973, p. 31 (広田昌義訳『パスカルの形而上学』人文書院, 1981, p. 42)
- 2) 『説得術について』の執筆時期についての最新の論考はグイエによるものであり, それによれば1659-1660年とされている。Henri Gouhier, 《Appendice II, Sur la date de "L'art de persuader"》 in *Cartésianisme et Augustinisme au XVIIe siècle*, Vrin, 1978, pp. 179-184.
- 3) *De l'art de persuader*, in *Pascal, Œuvres complètes*, publiées par L.Lafuma, Seuil, 1963 (以下O.C. と略記), p. 356.
- 4) Chaïm Perelman, *L'empire rhétorique — rhétorique et argumentation —*, Vrin, 1977, p. 35 (三輪正訳『説得の論理学——新しいレトリック——』理想社, 1980, p.46)
- 5) *De l'art de persuader*, p. 356.
- 6) *ibid.*
- 7) *ibid.*, p. 355.
- 8) Aristoteles, *De Arte Rhetorica*, ex recensione Immanuelis Bekkeri edidit Academia Regina Borussica, *Aristotelis Opera*, II, 2Ba, Berlin, Walter de Gruyter & Co., 1960, 1355b26-27. (この数字はベッカー版の頁数と行数, aはそれの左欄, bは右欄を示す。) (山本光雄訳『弁論術』、『アリストテレス全集』第16巻, 岩波書店, 1986, p. 9) なおフリーズ版, デュフェール版の訳も参考にした。*The "Art" of Rhetoric*, with an English translation by John Henry Freese, revised ed., London, Harvard University Press, 1959; *Rhétorique*, texte établi et traduit par Médéric Dufour et André Wartelle, Société d'éditions 《Les Belles Lettres》, 1960-1973, 3vol.
- 9) *ibid.*, 1403b6-8. なお, 立証, 配列, 言語表現は, その後のラテンの弁論術の用語に従ってそれぞれを *inventio*, *dispositio*, *elocutio* と呼ぶのが慣例である。
- 10) 1690年刊行のフェルチエール *Furetière* の辞書による「レトリック」の定義は次の通り。《RHETORIQUE. s.f. Eloquence, art qui enseigne à bien parler, à haranguer, à dire les choses propres pour persuader.》又パスカルと同時代のデカルトがレトリックを説得と関連させて考えていたことが次の箇所からうかがえる。《Ceux qui ont le raisonnement le plus fort, & qui digèrent le mieux leurs pensées, afin de les rendre claires et intelligibles, peuvent toujours le mieux persuader ce qu'ils proposent, encore qu'ils ne parlent que bas Breton, et qu'ils n'eussent jamais appris de Rhétorique.》Descartes, *Discours de la méthode*, in *Descartes, Œuvres complètes*, publiées par Ch. Adam et P.Tannery, nouvelle éd., t.VI, Vrin, 1973, p. 7
- 11) Aristoteles, *op. cit.*, 1356a1-4 (訳書, p. 10).
- 12) *De l'art de persuader*, O.C., p. 356[強調引用者].
- 13) Aristoteles, *op. cit.*, 1356a4-13 (訳書, pp.10-11).
- 14) *ibid.*, 1378a6-16 (訳書, p. 100).
- 15) Roland Barthes, 《L'ancienne rhétorique — Aide-mémoire —》 in *Communications*, N°16, Seuil, 1970, p. 212 (沢崎浩平訳『旧修辞学——便覧』みすず書房, 1979, pp. 122-123).

## 第一章

- 1) ソルボンヌでのアルノー譴責をめぐる審議は、1640年にスペイン領フランドルの司教ジャンセニウス Cornelius Jansenius の『アウグスティヌス』 *Augustinus* が死後出版されて引き起こされたジャンセニスム論争の一環である。16世紀以来カトリック教会内で恩寵と自由意志の関係をめぐって繰り返されてきた激しい論争に再び火をつけた彼の著作は、自然本性の腐敗を基本理念とする悲観主義的な主張においてアウグスティヌス主義の極限的形態をとっており、1642年の教皇ウルバヌス八世による断罪に続き、1653年、『アウグスティヌス』の恩寵論を要約するものとして提出された五命題がインノケンティウス十世によって異端宣告を下された。しかし宣告においては五命題と『アウグスティヌス』との関係は曖昧だったため、フランスにおけるジャンセニスムの牙城であるポール・ロワヤルの人々は沈黙を守った。しかし、1655年2月に告解に行ったある貴族がポール・ロワヤルとの関わりを理由に赦免を拒否された事件をきっかけに、アルノーはペンを取るが、その『あるフランスのやんごとない貴族に宛てた、ソルボンヌ博士アルノー氏の第二の手紙』 *Seconde Lettre de Monsieur Arnauld, Docteur de Sorbonne, à un duc et pair de France* (1655.7.10) に対してパリ大学神学部（ソルボンヌ）での詮議が要求された。審議は事実問題 *question de fait*（断罪された五命題が異端であることは認めるが、しかしそれらの命題がジャンセニウスの『アウグスティヌス』の中には存在しないと主張したこと）と法問題 *question de droit*（ペテロは義人であったが恩寵が欠けていたと主張したことをめぐる恩寵に関する問題）について行われた。『プロヴァンシアル』の「第一の手紙」が書かれるのは事実問題について譴責が既になされ、法問題についても譴責は必至といった状況下においてである。
- 2) 良心例学 *casuistique* とは本来、本質的に普遍的な倫理道德の法則を個々の良心に起こる具体的な場合にあってはめて善悪の判断をする良心のいろいろな場合 *cas de conscience* の研究であって非常に古い歴史をもち、特にトリエント公会議(1545-1563)で告解が義務づけられたのに伴って一層の発展をみせた。こうした良心例学がイエズス会にあっては蓋然論と結びついて道德の放漫主義を生んだ。『プロヴァンシアル』でもさかんに攻撃されている蓋然論とは、たった一人でも権威ある博士が唱えた意見は、たとえより蓋然的 *probable* (=是認するに値する) 意見や対立する意見があったとしても蓋然的とされるに十分とする格率で、これに従えば実質上許されないことは何もなくなくなり、結果的に社会に道德的墮落を生じさせることは明らかであった。イエズス会の良心例学者の著作はアルノーを含む多くの人々から非難され、実際に譴責処分を受けることもしばしばであった。こうした道德論争も『プロヴァンシアル』を生んだ一つの背景である。
- 3) メナールの年表によれば、『恩寵文書』の推定執筆年代は1655年末から1656年初めである。J. Mesnard, *Les «Pensées» de Pascal*, Sedes, 1976, p. 356.
- 4) cf. P. Annat, *La bonne foi des Jansénistes en la citation des auteurs reconnue dans les lettres que le secrétaire de Port-Royal a fait courir depuis Pâques*, Paris, 1656.
- 5) この名前の由来についての決定的な説はまだ無いが、ルイ・マランは *Les Pensées*, L745-B18bis (Lはラフェュマ版, Bはブランシュヴィック版の断章番号であることを示す。なお、以下パンセの引用はO. C. による。) と関連させて魅力的な仮説を提示している。Louis Marin, *La critique du discours sur la "Logique de Port-Royal" et les "Pensées" de Pascal*, Les Éditions de Minuit, 1975, pp. 334-337.
- 6) cf. *Les Pensées*, L597-B455.
- 7) Aristoteles, *op. cit.*, 1358b1-8 (訳書, p. 20).

- 8) Dominique Descotes, 《Le rapport des parties dans les *Provinciales*》 in *Pascal, Corneille — desert, retraite, engagement—, Papers on French Seventeenth Century Literature*, Paris-Seattle-Tübingen, 1984, p. 12.
- 9) *Réponse du provincial aux deux premières lettres de son ami*, p. 36.
- 10) *Pascal, Œuvres complètes*, publiées par J.Mesnard, t.I, Desclée de Brouwer, 1964, p. 1075.
- 11) デュシェーヌは『プロヴァンシアル』に至るまでのジャンセニストとイエズス会との間の論争について、それに関心を持つ人々の層の広がりを三段階に分けている。Roger Duchêne, *L'imposture littéraire dans 《Les Provinciales》 de Pascal*, Deuxième Édition, augmentée, Université de Provence, 1985, pp. 1-8.

## 第二章

- 1) 1re *Prov.*, p. 3.
- 2) ラシーヌは手紙の作者をスキュデリ嬢と推定している。もう一通の手紙はアカデミー会員からのもので、権威者の評価として「第一の手紙」の信憑性に箔をつけている。
- 3) *Réponse*, pp. 37-38.
- 4) 1re *Prov.*, p. 7.
- 5) *Les Pensées*, L742-B108.

## 第三章

- 1) イエズス会士モリナ Luis de Molina (1535-1600) はルネサンスのユマニスト的樂觀主義に基づき自由意志を強調する恩寵論を唱えた。アウグスティヌスやトマス・アクワナスの伝統からみると近代的なこの教えをモリニズムと呼ぶ。モリニズムは伝統的かつ悲觀主義的なジャンセニズムの対極に位置しており、ジャンセニウスの『アウグスティヌス』はモリニズムがペラギウスの流れをくむ異端であることを示そうとしている。
- 2) ニコルは『プロヴァンシアル』のラテン語版でニコライ神父を新トマス派の系列に含めたのはパスカルの誤解であるとしている。cf. éd. Cognet, p. 74, note 1.
- 3) 1re *Prov.*, p. 13.
- 4) *ibid.*, p. 18.
- 5) 11e *Prov.*, p. 204.
- 6) 《Ainsi tous vos raffinements tombent par terre, et vous n'avez pu donner la moindre apparence à une accusation qu'il n'eût été permis d'avancer qu'avec des preuves invincibles.》 16e *Prov.*, p. 317.
- 7) 《c'est dans sa *Somme*, pages 213 et 214 de la sixième édition》 6e *Prov.*, p. 110.
- 8) 5e *Prov.*, pp. 72-73[強調引用者].
- 9) パスカルはモンタルトが引用を忠実に報告していることを強調している。cf. 《je ne fasse que rapporter simplement et citer fidèlement leurs paroles》 7e *Prov.*, p. 131.
- 10) 5e *Prov.*, p. 78.
- 11) *ibid.*
- 12) 《car je ne dis jamais rien de moi-même》 9e *Prov.*, pp. 153-154.

- 13) 「意思の導き」 *direction d'intention* とは、よからぬ行為を行おうとする場合、その行為の目標として聖書が禁じていない事柄を考えるように意志を誘導して、要するに言い訳を考えて、それを許そうとする教え。cf. *7e Prov.*, pp. 115–117.
- 14) *7e Prov.*, pp. 124–125.ただし初版では最後の *Pierre Navarre* の名は出てこないで九人。
- 15) *ibid.*, p. 125.
- 16) *6e Prov.*, p. 98.
- 17) 《Aussi, me dit-il, vous voyez que je ne les cache pas》 *8e Prov.*, p. 151.
- 18) *7e Prov.*, pp. 130–131.

### 結論

- 1) *Les Pensées*, L745–B18bis.
- 2) Pierre Nicole, *Avertissement sur les dix-huit lettres*, in éd. Cognet, p.478.